

&Arts

第10号

Photo: 上原ミワ

過去から現在へ
— 循環する、まちの歴史 —

ARTIST'S VIEW / インタビュー

ケレン・ベンベニスティ
KEREN BENBENISTY

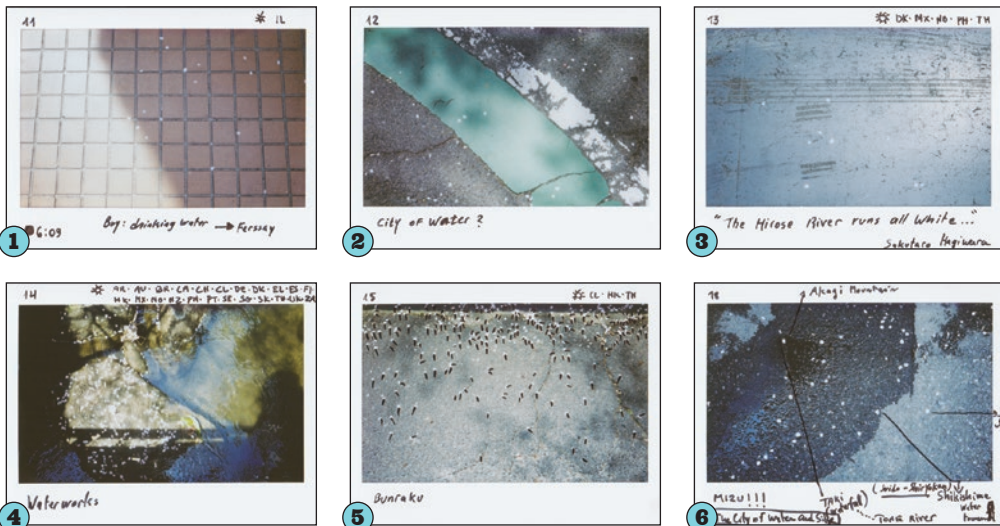
特集「まちを流れる水のはなし」

アーティストコラム 西尾美也





前橋に滞在中、日々訪れた場所で
見つけた桜の花びらたち（本人撮影）



INTERVIEW

過去からやって来た今を、 形にする。

RAPTURE FROM THE PAST, RENEWAL FOR THE FUTURE.

歴史的遺物から身の回りにある日用品、水など
様々なものから着想を得て、今ここに存在する
時間が、過去や未来とも周期的に繋がっている
ことを表現し続けるアーティスト、ケレン・ベ
ンベニスティさん。イスラエル出身で、現在は
ニューヨークに拠点を置きながらも、様々な国
と地域の美術館・ギャラリーで展示を行う彼女
に、リサーチで訪れた前橋の印象から、これか
ら招聘アーティストとして取り組んでいきたい
ことまで、幅広く聞いてみた。

—前橋に来たのは初めてですか。

アジアや日本自体も初めてですし、もちろん前橋も
初めてです。

—前橋の印象はどうでしょうか。

1 週間の滞在期間中と、最終日の今日とでは印象が
全く異なります。今日初めて山の方へ出かけました。
神社や川に行ったり、敷島公園に行ったりして自然の
中を歩いてみたのですが、それでやっと、山の近くに
ある街にいるんだという実感を得ることが出来ました。
それまでは日本にいてのに、正直、今自分がどこにい
るのか分かりませんでした。自分自身を一体どこに位
置付けたいのか分からないと感じていたんです。
今日実際に赤城山へ行ったことで「ああ自分は今、山
の麓にある日本のこんな街にいるんだな」と、自分を
日本の中に位置付けて認識することができました。
また 2 つ目に、前橋の街と美術館がどのような関わりを

聞き手：遠藤千尋
通 訳：海老原周子

持っているのかという事に、非常に関心を持ちました。
始めはどんな関係性があるのか全く分からなかったの
ですが、1 週間滞在をしてみて、前橋は小さい街で、
その中のある部分では、新しいことも色々起きてはい
るけれども、やはり一度は何かが止まってしまった場
所なんだという事が分かりました。そして、街が止ま
ってしまったことを認識した上で、また自分たちの手
でそれを作り直していこうとしている。そんな印象を
受けました。

—赤城山は、具体的にはどこへ行ったのですか。

赤城神社と滝沢不動尊の 2 か所へ行きました。神社
とお寺の違いがはっきり分からないので、今度詳しく
教えて欲しいのですが……。 (注：滝沢不動尊は 2016
年 9 月に、アーティストユニット「風景と食設計室
ホー」が朗読と食事のツアーパフォーマンスを行った
場所。)

—そこでどのようなことを感じましたか。

まず、風景が全く違うところに新鮮さを感じました。
特に土や石といった自然のものが、自分が見てきたこ
れまでのものと全く違っていて美しかったです。映画
や本で知ったり、観光客がInstagramやフェイス
ブックであげていたものを見たりして、ついつい知っ
た気になってしまいがちですが、実際に現地で見たり
触れたりすることで、全く異なる印象を受け取ること
ができましたし、感じることも沢山ありましたね。

—写真はどこで撮ったのですか。

アーツ前橋の通りにある、桜の木の下を撮ったもの
です。時間や日にちは違いますが、全て同じ場所で
撮影しました。毎日つけている日記の一部として写真
を撮影し、滞在中感じたことを一つひとつ、自分の中
で消化していきました。地面に落ちた桜の花びらの枚
数を、毎日数えて記録したりもしたので、本当に自分
の日記の一部のようなものです。

—今まではどんなテーマで作品を作ってきましたか。

過去と、過去から流れてくる現在、現在性をテーマ
にして全体の作品づくりをしてきました。例えば、19
世紀から今の時代までの一連の流れにフォーカスする
ことで、過去から現在を表現し、私たちがどう生きて
いるのか、つまり過去の流れから私たちがどのように
営んできたのか、といったことを伝えようとしたこと
もあります。作品のテーマは、それぞれの土地やプロジ
ェクトごとに個別に設定していますし、使う手法につ



Photo: 土屋/IC

いても、それぞれのコンセプトに基づいて毎回変えて
はいるのですが、時間の概念というものが大きなテー
マとして、全ての作品に現れていると思います。

また、“revolution (革命)”や“revolve (回転す
る)”という言葉の、本来のラテン語の意味にもインス
ピレーションを受けています。どちらも、もともとの
由来は「循環」や「回転」といった概念から来ている
ので、前だけでなく後ろ向きにも回転していくような、
二面性のあるイメージがこれらの言葉には含まれてい
ます。後ろ向きに回転していても、戻ると一回転して
また新しいものになる。転換や循環といった要素もま
た、作品に反映されていると思います。

—時間を題材にしようと思ったのはなぜですか。

アーティストとして時間をテーマに選んだというよ
りは、もともと時間というものに関心があったから、
題材にしたという方が正しいと思います。現代を理解
するには、現代がやって来た場所である、過去を理解
しなければいけません。そして、過去には産業革命な
どの時代だけでなく、人間社会が出来上がるもっと昔
から存在する、自然や環境といったものもあります。
イタリア人哲学者ジョルジョ・アガンベンが書いた
『哲学とは何か』という本には、現代を理解する為に
4 つの要素が必要だと書かれており、1 つ目には詩、2
つ目にはファッション、3 つ目にはアート、そして 4
つ目には星が挙げられています。ここでの星は、いわ
ゆる占いや星学ではなく、星の動きや光のことを指す

ようです。これらを含んだものが過去であり、過去は
直接、ものごとの根源 (arche) へ繋がっています。だ
から時代の根源を理解するためには、今の時代の流れ
だけでなく、過去についても理解する必要があるのだ
す。自分の中にこうした考えがあったので、アーティ
ストとして時間に関心を持つことも、ごく自然な流れ
として捉えることが出来ました。

もうひとつは、自分の出自とも関係があると思いま
す。私の出身地であるイスラエルという国は 1948 年
に出来て、まだ 60 年ほどの若い国なのですが、歴史
的に見るとイスラムやバビロニアの時代など、かなり
昔から文明があった地域でもあります。歴史も文化も、
宗教的にも融合しているので、街を掘ったりすると歴
史的遺産が出てきますが、それは誰のものなのか？ど
こに帰属するのか？と、すぐに政治的な課題になって
しまいます。そういったところが非常に複雑な地域で、
街には H&M やショッピングモールといったものもあ
るけれど、その近くを流れる川やショッピングモール
の下には遺産が眠っていたりする。そんなふう to 過去
と現代が密接に関わりあっている場所の出身であるこ
とも、「時間」というテーマに関心を持った理由のひ
とつだと思います。

—《Kamil》など水が出てくる作品をいくつか作られ
ていますが、水をどのような意味で作品に登場します
か。また、それと時間との関連性はありますか。

噴水の写真を 1 秒間撮った《Kamil》は、水だけで



《Kamil》
2014 年 ビデオ・ドローイング インスタレーション
HD ビデオプロジェクションにドローイング
132 x 154 cm

KEREN BENBENISTY
ケレン・ベンベニスティ

1977 年イスラエル生まれ。1998 年にパリに移住、現在はニューヨークを拠点に活動。
2004 年にエコール・デ・ボザール (フランス) 卒業。2011 年インターナショナル・
スタジオ&キュラトリアルプログラム (アメリカ)、2016 年レジデンシー・アンリミテッド
(アメリカ) などで滞在制作を行う。これまで、アメリカやイスラエル、様々な国や地域
の美術館やギャラリーで展示を行っている。

なく、色々なメタファー (隠喩) が重なった作品で
す。モチーフになったスフィンクスの噴水は、パリ
の中心街にある有名なものなのですが、スフィンク
スにはナポレオンや植民地主義といったメタファー
や、半分人間で半分動物の姿で、大切なものを守っ
ているといったメタファーがあります。また、謎解
きに答えられないと道を通して欲らないという神話
から、「暗号」や「言葉」などのメタファーも含んで
います。この作品では、1 秒間に 24 枚の写真をト
レースし、再度またそれをビデオに映し出す手法を
使い、継続して同じ場所を流れ続けている水も、切
り取る瞬間や切り取り方によって毎回違った姿を見
せることを表現しました。他にも水を使った作品は
色々を作っているのですが、継続してこんこん湧
き出てくる水や噴水を使って、永遠に発し続けられ
る言葉や、永遠に続く時間、そういった水と時間と
の繋がりを表現しようとしてきました。

—前橋ではどんな作品を作りたいですか。

水について何かやりたいという想いは変わってい
ないのですが、来る前と後ではイメージが少し変わ
りました。例えば、Google 検索で「日本 水」と
調べると福島第一原発のことが出てくるので、来る
前は前橋の市役所などへ行き、水質に関するリサー
チを進めることで、日本の自然環境についての作品
を作ろうと考えていました。しかし、実際に滞在す
る中で、前橋には昔から水源地があり、それを起点
として絹の産業が栄えてきたことなどがだんだんと
分かってきたので、今の段階では、実際の山や自然
の中からどんなふう to 水が流れて出ていき、絹の工
場まで行くのか。そして、絹を作る現場ではどんな
ふう to 水が使われるのか。そういったことを作品に
したいと考えています。実際に絹を題材にするかど
うかはまだ検討中ですが、山から流れていった水が
絹という加工物に使われていくように、今回のリサ
ーチや前橋の滞在が自分の中を通過していき、作品
の形になればと思っています。

呑龍仲店



弁天通り商店街から一本外れた道を進むと、昭和の雰囲気漂うアーケード付きの幅の狭い路地に、小さな飲食店が並んだ空間が出現します。

呑龍仲店は終戦間もない1947年、復員者が生計を立てる場として、大蓮寺墓地跡に建設されました。住居と店舗が一体となった木造2階建ての共同施設には、食料や日用品を売る店が軒を連ね、空襲で焼け野原となった前橋の復興のシンボルとして親しまれました。

高度経済成長期に入ると、夜の繁華街に生まれ変わった呑龍仲店でしたが、1983年より2度の火災に見舞われます。現在は再建を経て、開いているお店は数件になってしまいましたが、幅広い世代の店主たちによって今も「昭和レトロ」な賑わいを保ち続けています。

特集

まちを流れる水のはなし



いつの頃からか、前橋は「水と緑と詩のまち」といわれるようになりました。しかし、なぜ前橋が「水のまち」なのか。「利根川や広瀬川があるから?」「赤城山の大雨があるから?」色々な意見がありますが、理由をはっきり答えられる人はそんなにはいないでしょう。ここでは、そんなまちの中を流れる水のエピソードを集めてみました。

千代田町にある相川のれんでは、「引き染め」という染色方法で、反物を引き伸ばして張った状態に広げ、専用の筆で染色・糊付けしたあと、一つひとつを水で洗って糊を落としていきます。全てを手作業で行うため技術がいるほか、洗った後の反物を数日間天日干ししなければいけないため、天候にも左右される難しい手法です。敷地の一角にある1メートル四方の水槽で糊を落としていくと、糊を付けた部分には色が入らず、そのまま文字や模様になります。今では水道水を使用していますが、先々代の時代には、井戸水や川の水でこの作業をしていたそうです。

まちの中を流れる水はどこからどこへ流れていき、そしてどのように使われているのでしょうか? 飲み水や洗濯、皿洗いなどに使う生活用水、田畑を潤すために引かれる農業用水、工場で使う工業用水など、水には様々な使われ方があります。特に前橋では、古くから盛んだった製糸業の中で使われた水、広瀬川の水の流れやせせらぎを作り、行き交う人々に癒しを与える水など、前橋独自の使われ方が存在するかもしれません。今回の特集では、私たちが普段の暮らしの中で「まちを流れる水」を感じられる瞬間と、そこに隠れている「そうだったのか!」を切り取っていきます。

染物屋

前橋にはまちの中心に製糸工場があったことから、現在でも染物屋が点在しています。馬場川通りから銀座通りまでの一角も、旧町名では「紺屋町」と呼ばれていたほど。「相川のれん」も明治から4代続く染物屋さんで、のれん・半纏・のぼり・横断幕・旗などを作っています。



広瀬川

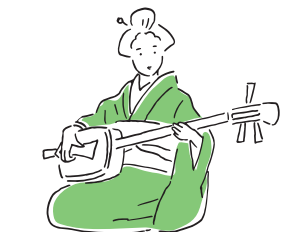
実は広瀬川が、人の手によって管理されている川だということを知っていますか? もともと広瀬川は、利根川の水をまちなか〜文京町のあたりの農地へ供給するため、整備された川でした。広瀬川のあちこちには水量を管理するための堰があり、農閑期の1〜3月頃には清掃や点検などの理由から、計画的な断水も行っています。

馬場川

アーツ前橋の目の前を流れる馬場川は、広瀬川とは対照的に川幅が狭く、水量もそれほど多くなかったため、より人々の生活に寄り添った川として親しまれてきました。かつては染物屋の職人が染物を洗ったり、周りに住む人が食器洗いや洗濯をしたりしていたようです。

製糸工場

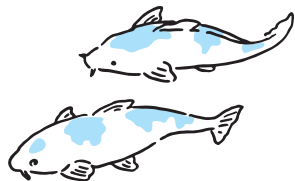
明治3年、当時の前橋藩が日本初の器械製糸場を作りました。そこから明治37年までに、市内の製糸工場は151件にまで増え、作られた糸は横浜の藩営直売所やイギリスのロンドンにまで輸出されました。広瀬川沿いにあったバー「交水社」も、近くにあった同名の製糸工場の名前を取って付けられたのだそう。また製糸工場でも、動力に水車を使っていただけでなく、繭をお湯で煮たり、水に浸したままの状態で糸を繰ったりと、水を使う作業がとても多かったようです。



明治頃の馬場川通り沿いは、製糸産業の好況もあり花街として栄えました。川沿いには料理屋、待合茶屋、貸座敷などが並び、京都の鴨川を思わせるような川床もあったと言われています。昼夜三味線の音が聴こえる、今とは少し違った雰囲気の間所だったのかもしれません。

水道水と地下水

「どこを掘っても井戸水が出る」といわれる前橋では、水道水の半分以上が地下水を組み上げたものを使っています。しかも水質が良いため、法律で最低限決められた塩素を混ぜるという処理を除いては、ほとんど手を加えず、そのまま配水しているそうです。市内には敷島浄水場をはじめとした36箇所の浄水場があり、約14万世帯に水道水を供給しています。



鯉とため池

今は大部分がなくなってしまいましたが、昭和の半ば頃まで、前橋駅の南側にはたくさんのため池があり、そこでは何匹もの鯉が養殖されていました。錦鯉など観賞用の鯉が多く、高値で取引されていたようです。前橋駅の南側は、少し凹んだ地形になっているので水が出やすく、ため池が作りやすかったのではないかとわれています。



粉物料理と水

お切り込み、すいとん、蕎麦、うどん、焼きまんじゅう……麦作が盛んな前橋では昔から、小麦粉を使った料理をよく食べてきました。麦作りには、からっ風や赤城おろしが吹き荒れるような、ある程度乾燥した気候も必要ですが、稲穂に適度な水分を入れることのできる水はけの良い土地であることも重要なため、ここでも、前橋の水が深く関わっていると云えます。



昭和4年（1929年）に竣工された敷島浄水場の配水塔は、前橋の上水道の歴史を物語るシンボル。水道資料館の建物とともに国登録有形文化財となっている。

水質の良い地下水がたくさん採れる理由としては、利根川や広瀬川、桃木川といった大小さまざまな川があり水源が豊富なこと、地下水が浸透しやすい水はけの良い地質であること、地下に大きな基礎を作らなければいけない大規模な都市開発があまり進んでいないことなどが考えられるようです。



前橋駅の噴水

1980年代まで、前橋駅北口には噴水がありました。当時は、美しい洋風木造建築の先代駅舎とともに、前橋駅のモニュメントとして市民に親しまれていましたが、1983年から行われた駅の再開発整備にともない取り壊されました。しかし、噴水中央に設置されていた銅像は、変わらず前橋駅北口に残っており、当時の面影を偲ばせています。

参考文献
土屋喬雄序、山本三郎著『製糸業近代化の研究』,群馬県文化事業振興会,1974
望月あきら『まんが前橋の歴史』,前橋市,1992
倉地啓仁『旧町名への旅』,前橋商工会議所,2009
協力／相川のれん、前橋市環境部 環境政策課

「アートプロジェクト型身体にとってのリラクゼーション」西尾美也

最近ハマっているのが、童謡「ともだちになるために」です。これを口ずさまない日はありません。きっかけは約3ヶ月前、息子の幼稚園の卒園式のために、お母さんたちがコーラスをするというので、妻が家で練習をはじめたことです。この曲では、人との出会いを「ともだちになるため」だと明確に表し、「どこのどんなひととも ぎっとわかりあえるさ」と人を信頼することの大切さを語りかけます。また、人権学習の教材として、手話に親しむことも目的に設計されており、妻も手話付きで練習をがんばっていました。そのときは他人事でしたが、卒園式を終えたある日の夜、1歳の娘を寝かしつけるのに、僕の口からふいにこの曲が出てきました。うろ覚えなので寝かしつけられず、YouTubeを見ながら歌唱を繰り返しました。そして、娘が寝静まったというのに、僕はこの歌をやめることができなかったのです。この歌詞が、このコンセプトが、僕の身体に染み込んできたとしか言いようがないハマり方をその後することになります。僕が「いままでであったたくさんの きみときみときみときみ……」と歌うとき、そこには、これまでアートプロジェクトを通じて出会ってきたたくさんの人たちの姿が亡霊のように僕を囲んでいるのではないか。各地に赴いてさまざまな人に会い、助けられ、固有のコミュニケーションと作品が実現するわけですが、アーティストとしての僕はまた次の場所に去っていかざるを得ません。そのことにおそらく僕は、罪悪感のようなものをどこかで感じているでしょう。この歌をある種の折りとして、そうした人たちに捧げるために、また同時に「これからであうたくさんの きみときみときみ……」に向けて、僕はこの歌をやめることができないのだと思います。この曲はアートプロジェクト型の僕の身体にとってのリラクゼーションなのです。



提供：京都市立芸術大学

西尾美也（にしお・よしなり）

1982年奈良県生まれ。同県在住。東京藝術大学大学院博士後期課程修了。博士（美術）。文化庁芸術家在外研修員などを経て、現在、奈良県立大学地域創造学部専任講師。ファッションブランドFORM ON WORDSも手がける。アーツ前橋では、グループ展「服の記憶」（2014年）に参加した他、地域アートプロジェクトを通して、スタッフユニフォームの制作を行った。

アーツ前橋では、平成28年度に64点の作品を新たに収蔵しました。前橋市がこれまでに収蔵してきた作品は約710点になります。これらの美術作品は、市民にとって大切な宝ものであり、未来へ残して伝えていく贈り物です。ここでは収蔵作品と作家を紹介します。



自然観照による細密描写

田中青坪《暮沼》
TANAKA Seihyo Marsh Sunset
1923（大正12）年 絹本彩色 82.2×110.7cm
平成28年度購入

草いきれのするような沼の情景。この作品に描かれた風景がどのあたりの沼に取材したものかは定かではありませんが、点描で表現された樹木や、細密な草木など細部まで丁寧に描きこまれています。画中に、「大正十二年八月」との記載があり、蒸し暑い最中、足繁くスケッチに通ったことでしょう。枯れかけた草木や虫による病葉（わくらば）など、一つひとつを拾い上げるかのように自然のありのままを描こうとする、田中青坪（1903-1994）の真摯な態度が感じられる作品です。

田中青坪は、明治36年に前橋市本町に生まれ、3歳のとき一家で東京に移り住みます。はじめ洋画を学びますが、のちに師となる小茂田青樹（おもだ・せいじゅ）との出会いから日本画に転向します。《暮沼》は青坪の最初期の作品で、細密描写の指向に青樹の影響が見てとれます。戦後になり青坪は次々に様式を変えながら、新しい日本画の表現を模索し続けていきます。写実と装飾性を両立しようとした花鳥画や、色面構成や線描表現による視覚効果を狙った人物画、そして晩年の〈武蔵野シリーズ〉や〈浅間シリーズ〉などの深い自然観照による風景画は青坪の代表作といえます。

洋画から出発し、琳派や狩野派、東洋画などの古典に学び、新しい日本画の創造を模索し続けてきた青坪ですが、そこには徹底した自然観照による細密な描写と色彩を駆使することで生まれる自然美把握でした。

TOPIC

鑑賞サポートツール 《folks／フォークス》

鑑賞するための“カラダ”の ほぐし方を考えるプロジェクト



Photo: 木暮伸也

作品を鑑賞するとき、「自分には難しい、わからない」という抵抗感や、「どのように鑑賞したらいいのだろう」という戸惑いを感じることで、美術館から足が遠のいてしまう人も少なくないようです。

アーツ前橋では、こうした抵抗感や戸惑いを解きほぐして、鑑賞者が自ら発見し、気づきを得られるような鑑賞体験をできるようにするにはどうすればいいかを考え、2015年から群馬大学と連携して、鑑賞サポートツールの制作を行ってきました。

アーティストや学芸員、大学教員だけで考えるのではなく、前橋を中心に県内各地から、高校生、大学生、教員、施設職員、脚本家、主婦など職業も年代もさまざまな人が参加し、「鑑賞とは何か」「アートとは何か」「美術館は何のためにあるのか」など意見交換と試行錯誤を重ねてきました。そして完成したのが、鑑賞前の心や感覚を開くための「鑑賞ウォーミングアップツール」と、作品の作者本人や展覧会を企画した学芸員の声を聞くことができる「鑑賞ガイド」です。

「鑑賞ウォーミングアップツール」は、見ること、聞くこと、身体の細部にまで意識的になるような内容としました。「鑑賞ガイド」は、作家本人の生の声や、学芸員からのメッセージを聞くことにより、「もう一度見てみよう」「もっと見てみよう」と思ってもらえればと考えました。7月21日からはじまる「コレクション+ アートの秘密 私と出会う5つのアプローチ」展からお披露目します。ぜひ、アーツ前橋に来館した際には、体験してみてください。

まえばしぶんか探索隊

うしろまえばし

「うしろまえばし」はアーツ前橋のアートスクール受講生が立ち上げたプロジェクト。街を歩いて気になるものをアーカイブしていきます。活動はFacebookでチェック！

<https://www.facebook.com/ushiromaebashi/>



「棒高跳び選手の家？」

とても完成度の高いトマソン物件発見。住吉町二丁目公民館。このドア開けるの、勇気要ります。美術家の赤瀬川原平さんの分類によると「高所」タイプです。ずっと残してほしいですね。（隊員A）

まえばし COLLECTORS FILE #7

コレクターズ・ファイル

街の人が集めているものを紹介してもらうコーナー。それがなんであれ、好きならば集めてしまうのが人というもの。集めればそこに新たな美が宿る？



カミキリムシの標本 120 箱 スケッチ・採集記録 23 冊 その他甲虫類の標本多数

40数年前から集めていて、専門はカミキリムシ。武尊山、赤城山、上野村や全国各地へ採集に行き、標本を自作しています。一番のお気に入りには秋に現れて越冬するコバヤハズカミキリなど、群馬のカミキリムシを集めて作ったもの。将来は博物館への寄贈も考えています。



国領町
村田元彦さん



情報求む！ 前橋で「こんな面白いモノを集めている人がいる！」という情報があればアンドアーツまでお寄せください。

滞在制作アイデア

滞在中には実現しなかったけれども、前橋のまちなかに滞在したからこそ生まれたアイデアを紹介します。

● 個人のポートレートを描く星座

市民の顔や身振りの特徴を星座に置き換える。その星の輝く夜空をみるためのプラネタリウムのような道具を作成する。児童文化センター等の施設と協働制作が必要になる。

● 標識絵画

日常の風景のなかに、交通標識のような普段と違う視覚的なデザインを導入させる。道路沿いに立てる標識を5～6本立て、順番に見ていくと何かの物語に気づく。けやき通りに設置できるとよいだろうか。

● 地域に分散設置する詩（言葉）

美術館を含む、街のなか数箇所に、人々を勇気付ける詩のような言葉を点在させる。よく見ないと気づかない方法で注意力を喚起する。

● 浮き輪

救助用の浮き輪のように役割が明らかなものを、あえて水辺ではないところに置くことで、誰かが自分を救う、あるいは自分が救う、という考えを喚起する。

● 美術館デザインへの市民参加

地域の伝統工芸品（提灯）などに市民が名前をいれて持ち寄り、それを建築デザインに活かす。

● 屋上庭園

前橋には人が集まる広場がない。赤城山や夜空を眺められる駐車場屋上を開放的な広場に変える。

● 緊急事態における美術館のマニュアルの製作

このマニュアルは、常に展示されており、自由に観覧もできる。ある意味、アーツ前橋のハートのモニュメントとしても存在する。

ARTIST

照屋勇賢 TERUYA Yuken

滞在期間：32日間

2011年2月28日～3月31日

EVENT

まちなかイベント情報

「夏の綺羅」

2017年6月30日[金]～2017年7月10日[月] 11:00～19:00

Gallery Artsoup

INKlude(インクルード)がお仕立てするアーティスト達のオリジナル浴衣とそれぞれの描く夏の美しいもの。

「大西功造マンドリンリサイタル」

2017年7月14日[金] 開場 18:30 開演 19:00

前橋文学館 ホール

萩原朔太郎の孫弟子にあたる両角文則氏の薫陶を長年受けた奏者が演奏する優美で繊細、可憐で愛らしい、そしてダイナミックなマンドリンの世界をお楽しみください。

「第5回『コワタンズ＊射音会』」

2017年8月11日[金] 開場 13:30 開演 14:00

前橋文学館 ホール

フルート＆クラリネットのデュオをベースに演奏する自由参加変化型音楽ユニット、コワタンズによる演奏会。客演は藤井由香さん(ピアノ)。

EXHIBITION

アーツ前橋 展覧会情報



三輪途道《普通のありよう 秀真》2009年

「コレクション＋

アートの秘密 私と出会う5つのアプローチ」

2017年7月21日[金]－9月26日[火]

開館時間：11:00～19:00 (入場は18:30まで)

休館日：水曜日

会場：アーツ前橋 地下ギャラリー

観覧料：一般500円／学生・65歳以上・団体300円／高校生以下無料

アートを鑑賞するってどうということ？

—— 作者や作品にまつわる知識を知らないと鑑賞はできないという思い込みが、時としてあなたをアートから遠ざけてしまっているかもしれません。

この展覧会では、まずは自分の目で注意深く作品を見てみる、そして作者や制作された背景を知ること、さらに興味を持ったら、自分の感じたことや考えたことを誰かに伝えてみる。すると自分とは違う他の人の感じ方や考えに触れて、違和感を受けることもあるかもしれませんが、新しい発見や気づきを得るでしょう。アートとの出会いは、私たちが自分のことを知る機会をつくってくれます。あなたもそんな体験をしてみませんか？

2017年9月18日[月・祝]－24日[日]

11:00～12:00 / 14:00～15:00

会場：展示室

参加費：無料 (要観覧券)

申込方法：事前申込制／電話で申込みください (027-230-1144)

関連イベント

「おしゃべりアートウィーク」

作品について気づいたこと、感じたことなど自由に話しながら、自分以外の誰かと作品と一緒に見ることの楽しさを体験します。

&Arts ISSUE 10 アンドアーツ 第10号

発行：平成29年6月30日 企画・発行：アーツ前橋 制作コーディネーター・編集：一般社団法人前橋まちなかエージェンシー

ライター：遠藤千尋 アートディレクション・デザイン：殿岡 渉 (あしか図案) 写真：上原ミワ、木暮伸也

アーツ前橋 〒371-0022 群馬県前橋市千代田町5-1-16 TEL: 027-230-1144 FAX: 027-232-2016 www.artsmaebashi.jp

今月のおすすめ

by

ROBSON COFFEE アーツ前橋店



冷たいバニラアイスに、温かいエスプレッソをかけて頂くアフォガート(550円)。エスプレッソには、キャラメルやチェリーのようなフルーティな甘さが特徴のブルンジ産コーヒーを使用。バニラアイスと程よく調和します。